第三講『吾妻鏡』

次の文章は、近世に成立した平仮名本『吾妻鏡』の一節である。源平の合戦の後、源頼朝（よりとも）（二位殿）は、異母弟の義経（よしつね）（九郎殿）に謀反の疑いを掛け、討伐の命を出す。義経は、郎党や愛妾（あいしょう）の静（しずか）御前を引き連れて各地を転々としたが、静とは大和国吉野で別れる。その後、静は捕らえられ、鎌倉に送られる。義経の行方も分からないまま、文治二年（一一八六）四月八日、鎌倉・鶴岡八幡宮（つるがおかはちまんぐう）に参詣した頼朝とその妻・北条政子（御台所（みだいどころ））は、歌舞の名手であった静に神前で舞を披露するよう求める。静は再三固辞したが、遂に扇を手に取って舞い始める。以下を読んで、後の設問に答えよ。

静（しづか）、まづ歌を吟じていはく、

吉野山みねのしら雪踏み分けて入りにし人の跡ぞこひしき

また別に曲を歌うて後、和歌を吟ず。その歌に、

しづやしづしづのをだまき繰り返し昔を今になすよしもがな

かやうに歌ひしかば、社壇（しやだん）も鳴り動くばかりに、[ア]上下いづれも興をもよほしけるところに、二位殿のたまふは、「今、八幡の宝前にて我が芸をいたすに、もつとも関東の万歳（ばんぜい）を祝（いは）ふべきに、人の聞きをもはばからず、反逆（ほんぎやく）の義経を慕（した）ひ、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

別の曲を歌ふ事、はなはだもつて奇怪（きくわい）なり」とて、イ御気色（きしよく）かはらせ給（たま）へば、御台所はきこしめし、「あまりに御怒（いか）りをうつさせ給ふな。我が身において思ひあたる事あり。君すでに流人とならせ給ひて、伊豆の国におはしましころ、われらと御ちぎりあさからずといへども、平家繁昌（はんじやう）の折ふしなれば、父（ちち）北条殿も、さすが時をおそれ給ひて、ウひそかにこれを、とどめ給ふ。しかれどもなほ君に心をかよはして、エくらき夜すがら降る雨をだにいとはず、かかぐる裳裾（もすそ）も露ばかりの隙（ひま）より、君のおはします御閨（ねや）のうちにしのび入り候（さぶら）ひしが、その後君は石橋山の戦場におもむかせ給ふ時、ひとり伊豆の山にのこりゐて、オ御命いかがあらんことを思ひくらせば、日になに程か、夜にいく度（たび）か、たましひを消し候ひし。そのなげきにくらべ候へば、今の静が心もさぞあるらむと思はれ、いたはしく候ふ。かれもし多年（たねん）九郎殿に相（あひ）なれしよしみをわすれ候ふ程ならば、カ貞女のこころざしにてあるべからず。今の静が歌の体（てい）、外には露ばかりの思ひをよせて、内には霧ふかき憤（いきどほ）りをふくむ。もつとも御あはれみありて、まげて御賞翫（しやうくわん）候へ」と、のたまへば、二位殿きこしめされ、ともに御涙（なみだ）をもよほしたる有様にて、キ御腹立（ふくりふ）をやめられける。しばらくして、簾中（れんちゆう）より卯の花がさねの御衣を静にこそは下されけれ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〔注〕

○吉野山～――「み吉野の山のしら雪踏み分けて入りにし人のおとづれもせぬ」（古今和歌集）を本歌とする。

○しづやしづ～――「いにしへのしづのをだまき繰り返し昔を今になすよしもがな」（伊勢物語）を本歌とする。「しづ（倭文）」は古代の織物の一種で、ここでは静の名を掛ける。「をだまき（苧環）」は、紡いだ麻糸を中を空洞にして玉状に巻いたもの。

○社壇――神を祭ってある建物。社殿。

○怒りをうつす――怒りの感情を顔に出す。

○流人――平治の乱の後、頼朝の父義朝（よしとも）は処刑、頼朝は十四歳で伊豆国に配流された。

○石橋山――神奈川県小田原市。治承四年（一一八〇）の石橋山の合戦の地。頼朝は平家方に大敗する。

○伊豆の山――静岡県熱海市の伊豆山（いずさん）神社。流人であった頼朝と政子の逢瀬の場。

○卯の花がさね――襲（かさね）の色目の名。表は白で、裏は青。初夏（四月）に着用する。

問一　傍線部ア・エ・オを現代語訳せよ。

ア＝

エ＝

オ＝

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問二「御気色かはらせ給へば」（傍線部イ）とあるが、なぜそうなったのか、説明せよ。

問三「ひそかにこれを、とどめ給ふ」（傍線部ウ）とあるが、具体的には何をとどめたのか、説明せよ。

問四「貞女のこころざし」（傍線部カ）とは、ここではどのような心のさまをいうのか、説明せよ。

問五「御腹立をやめられける」（傍線部キ）とあるが、政子の話のどのような所に心が動かされたのか、説明せよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第三講　復習問題

①「上下となく立ちこみて」の口語訳として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　入口であろうと出口であろうと、お構いなしに押し合って。
イ　人の体を踏みつけてしまいそうなほど混乱して。
ウ　誰彼とも知らない人々が一か所に集中して。
エ　身分の相違もお構いなしに押し合いへしあいしながら。

②「気色悪しければ」の語句の現代語訳として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　機嫌が悪いので
イ　薄気味悪いので
ウ　悪い兆しがあったので
エ　情趣が感じられないので

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

③　次の文を読んで後の**問**に答えよ。

この女心得たりけるにや、〈中略〉蔵人をまねきよせて、うちわらひて「『くれ竹の』（a）と申させ給へ。…」〈中略〉このこと奏し申せば、「さだめて古歌の句にてぞはべらん」とて御尋ねありけるに、その庭には知りたる人なかりければ、為家卿のもとへ御尋ねありけるに、とりあへず、ふるき歌とて、

たかくともなににかはせむくれ竹のひと夜ふたよのあだのふしをば（b）

問　次の解説文は、波線部ａ「くれ竹の」と、波線部ｂの和歌とについて述べたものである。空欄［Ａ］～［Ｃ］に入れる語句として最も適切なものを、ア～オのうちからそれぞれ一つずつ選べ。

波線部ｂの和歌にある「くれ竹」は、天皇の居殿の庭に植えられていたことから、高貴な身分にある天皇を表す。「よ」は竹の節のことで、「ふし」とともに「くれ竹」の［Ａ］である。また、「よ」は竹の節の意味と同時に同音の「夜」の意味をも持つ。この技法を［Ｂ］という。この歌の趣意は、相手がたとえ高貴な方であっても、その場限りの実のない逢瀬（おうせ）を頼みとすることはできません、というもの。波線部ａの「くれ竹の」は、女が波線部ｂの和歌を［Ｃ］として用い、天皇に自分の思いを伝えたのである。

ア　掛詞　　イ　縁語　　ウ　枕詞　　エ　引歌　　オ　本歌取り

Ａ＝　　　　Ｂ＝　　　　Ｃ＝

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第三講　模範解答

問一　ア　身分が高い者も低い者も皆
　エ　暗い夜に一晩中降る雨
　オ　頼朝様のお命がご無事であろうか〔＝頼朝様がご無事で生きていらっしゃるだろうか〕ということを
問二　静が関東の繁栄を祝うべきなのに、反逆者の義経を慕う歌を歌ったから。
問三　娘の政子が、平家の敵で配流の身である源頼朝と逢瀬を重ねること。
問四　長年連れ添った義経を静が一途に慕い続ける心のさま。
問五　静が義経を慕う気持ちと自分が頼朝を慕う気持ちを重ね合わせた所。

〔現代語訳〕

静が、まず歌を吟詠して言うことには、

吉野山……＝吉野山の峰の白雪を踏み分けて、山の中へ入って行った人〔＝源義経〕の行方が恋しいことです。

また別の曲を歌った後、和歌を吟詠する。その歌に、

しづやしづ……＝静よ静よとあの人が繰り返し私の名を呼んで下さった昔を、もう一度今に取り戻す手立てがあればなあ。

このように歌ったので、社殿も鳴り動くほどに、身分が高い者も低い者も皆、面白いと思ったところに、二位殿〔＝源頼朝〕がおっしゃることには、「今、八幡の神前で私が芸を奉納するにあたり、どのようにも関東の繁栄を祝わなければならないのに、外聞もはばからないで、反逆者の義経を慕い、（祝いとは）別の曲を歌うことは、じつにけしからん」とおっしゃって、ご機嫌が悪くおなりになったので、御台所〔＝北条政子〕がお聞きになり、「あまりにお怒りを顔にお出しなさいますな。私の身においても思い当たることがあります。あなたがすでに流罪の人とおなりになって、伊豆の国にいらっしゃった頃、私とご縁が浅くない仲であると言っても、平家が繁栄していた時期なので、（私の）父北条殿〔＝北条時政〕も、そうは言ってもやはり時勢を恐れなさって、内密にこのことを、制止なさる。そうではありますがそれでもやはり（私は）あなたに心を通わせて、暗い夜に

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

一晩中降る雨さえも厭わず、掻き上げた着物の裾も露に濡れ、ほんの少しの隙間から、あなたがいらっしゃるご寝所の中に忍び込みましたが、その後あなたが石橋山の戦場にいらっしゃるとき、（私は）一人伊豆山神社に残っていて、あなたのお命がご無事であろうかということを心配して過ごしていたので、昼にどれくらいか、夜に何度か、（嘆きのあまり）気を失うほどでした。その嘆きに比べますので、今の静の心もそのようであるのだろうとつい思われ、気の毒でございます。彼女がもし長年九郎殿（＝義経）に連れ添った親しみを忘れるほどでありますならば、貞淑な妻の心のありようではないでしょう。今の静の歌の姿は、表面には少しばかりの思いを傾けて、内面には深く嘆いた憤りをふくんでいます。たいそう可哀そうだとお思いになって、ぜひともご鑑賞なさってください」と、おっしゃると、二位殿はお聞きになって、（北の方と）一緒に涙をもよおしたご様子で、腹をお立てになるのをやめなさった。しばらくして、御簾の中から卯の花襲のお着物を静にお与えになった。

〔**重要単語**〕

○きしょく【気色】（「**けしき**」とも読む）…①**顔色**。　②**意向**。　③**気分**。

○よすがら【夜すがら】…**一晩中**。

○いたはし【労し】…①**苦しい**。　②**気の毒だ**。　③大切に世話したい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第三講　解答解説

〔解説〕

① 「**上下**」は問題になっていれば、「**身分の高い者と低い者**」という意味になる場合が多い。その意味がとれるのはエ。他の選択肢の解釈も不可。よって、正解はエ。

② 「**気色悪し**」は、重要単語で「**機嫌が悪い**」の意味。よって、正解はア。

③ 和歌の総合問題。Ａは、**キーワードの体言**から**想像**できるもの＝**縁語**。Ｂは、同音に意味が複数ある技巧＝掛詞。Ｃは、和歌の一部分をセリフとして用いること＝**引歌**（「本歌取り」は、「**ある和歌を元**にして**新しい和歌を作ること**」なので、Ｃの解答にはならない）。「縁語・引歌」は講義中に触れていないので、Ｂのみが「復習問題」となるが、せっかくなので入試問題そのままで出題しました。知らなかった人はこれを機会に覚えておこう。

〔解答〕

① エ　② ア　③ Ａ イ　Ｂ ア　Ｃ エ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。